

『オツベルと象』の「音読」「朗読」指導
—平成24～27年度の教科書と「学習指導要領」を中心に—

オルン・チャンホン

Teaching Miyazawa Kenji's "Ozbel and the Elephant"
through reading aloud activities:
An Analysis of Japanese Textbooks (2012-2015)
and the government curriculum guideline of the time

ORN Chanphorn

Abstract

Reading aloud was the teaching method used for Japanese language lessons when the "Government Curriculum Guideline (Draft)" was published in 1947. This method was used because junior high school students "were not accustomed to reading books". The "Study Guide" and "Research" sections in the textbooks of the time, following the "Governmental Curriculum Guidelines" released in 1951 and 1958, promoted reading aloud activities as a way for improving reading, speaking, and listening abilities. This paper will analyze the "Study Guide" sections of the textbooks published by Kyoiku Shuppan between 2012 and 2015 and particularly focus on the function of reading aloud activities in order to suggest new strategies for Japanese language education in Cambodia.

キーワード：音読 朗読 朗読劇 試案 みちしるべ

はじめに

戦後まもない昭和22年「学習指導要領（試案）」において、「音読」は、当時の国語授業の中心的な学習指導法であった。それは、「中学校の生徒は、本を読むことに慣れていない」という生徒観にもとづくものである。

戦後日本の教育改革以降、昭和28年から『オツベルと象』は中学校国語科教科書

に掲載されるようになった。これを教科書の出版社別に示すと、次のようになる。

昭和 28 年	東陽書籍（中学 2 年）
同 28 ～ 30 年・31 ～ 36 年・同 46 ～ 令和 3 年	教育出版
同 35・36 年	学校図書
同 44 ～ 46 年	日本書籍
同 52 年	日本書籍（小学校 6 年） ⁽¹⁾ 。

東陽書籍の中学校 2 年生、昭和 52 年版の小学校 6 年（日本書籍）を除いて、『オツベルと象』はすべて中学校 1 年生の教材に配当されている。これは「学習指導要領」の第 2 回目改訂以降のことである。旧稿に論じたように、特に昭和 26 年・昭和 33 年「学習指導要領」にもとづく教育出版教科書の「学習の手引き」「研究」では、『オツベルと象』の指導に際して「音読」という言語活動を通じて「読む・話す・聞く」力を育成しようとしていた⁽²⁾。

日本の「学習指導要領」は戦後から現在まで、10 回の改訂を経てきた。本稿では、最も長く『オツベルと象』を掲載し続けてきている教育出版の教科書を対象とする。教科書の「単元」も、「学習指導要領」の改訂に応じて改訂が加えられている⁽³⁾。

教育出版が『オツベルと象』を掲載した第一次は、昭和 28 ～ 30 年版『中学校国語一』である。最初の『オツベルと象』の単元は、「音読と黙読」である。

第二次は、昭和 31 ～ 36 年である。その最初にあたる昭和 31・32 年版『総合国語改訂一の上』では、『オツベルと象』は「少年文学」に配され、単元は「音読と黙読」であった。これは昭和 26 年 10 月実施「学習指導要領一般編（試案）」改訂版「中学校学習指導要領 国語科編（試案）」改訂版に準拠したものである。

次に、昭和 33 年 9 月施行「学習指導要領」に拠る昭和 33 ～ 36 年版『総合国語改訂一の上』「少年文学」でも、「音読と黙読」という活動をとおして、「読むこと・聞くこと・話す」力を育成しようとしたものであった。

この時期、つまり、昭和 26 年実施「学習指導要領」・同 33 年施行の「学習指導要領」が実施された昭和 28 ～ 36 年には、「音読と黙読」という活動が重視されていたのである。

しかし、それ以降の教科書の「学習の手引き」を確認したところ「音読」という項目は確認されなかった。

「音読」が再び登場するのは、平成 20 年告示の「学習指導要領」に準拠した平成 24 ～ 27 年版教科書『中学国語 1 伝え合う言葉』における単元「読むこと【構成と表現】」の「みちしるべ学習の手引き」である。

このように、『オツベルと象』は、「音読」教材として重視されてきた。本稿は、「音読」が再度浮上してくる教育出版平成 24 ～ 27 年版教科書の「みちしるべ学習の手引き」を参考として、今後のカンボジアにおける日本語教育「読解」に「音読」「朗読」を

生かしていく方法を考える。

1. 平成20年度「学習指導要領」

日本語教育を進展させようとしているカンボジアにとって、日本の国語教育の実践事例は、たいへん有意義な参考資料になる。その根幹を支える日本国文部科学省が示す「学習指導要領」も、カンボジアの日本語教育に益するところが大きい。

平成10年「学習指導要領」は、基礎・基本を確実に身に付けさせ、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を培うことを指針として掲げた。教育内容を厳選し、「総合的な学習の時間」を新設したのであった⁽⁴⁾。

この時期を経て、平成20年3月告示「国語科学習指導要領」が示した目標は、次のとおりである。

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる⁽⁵⁾。

ここで示された中学第1学年の国語科の具体的な目標は、さらに詳細に次のように説明されている。

- (1) 目的や場面に応じ、日常生活にかかわることなどについて構成を工夫して話す能力、話し手の意図を考えながら聞く能力、話題や方向をとらえて話し合う能力を身に付けさせるとともに、話したり聞いたりして考えをまとめようとする態度を育てる。
- (2) 目的や意図に応じ、日常生活にかかわることなどについて、構成を考えて的確に書く能力を身に付けさせるとともに、進んで文章を書いて考えをまとめようとする態度を育てる。
- (3) 目的や意図に応じ、様々な本や文章などを読み、内容や要旨を的確にとらえる能力を身に付けさせるとともに、読書を通してものの見方や考え方を広げようとする態度を育てる。

さらに、『オツベルと象』を教材とする中学校第1学年については、C「読むこと」の能力を育成するための指導が、次のように示された。

- ア 文脈の中における語句の意味を的確にとらえ、理解すること。
- イ 文章の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分け、目的や必要に応じて要約したり要旨をとらえたりすること。
- ウ 場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容の理解に役立てること。
- エ 文章の構成や展開、表現の特徴について、自分の考えをもつこと。
- オ 文章に表れているものの見方や考え方をとらえ、自分のものの見方や考え方

を広くすること。

カ 本や文章などから必要な情報を集めるための方法を身に付け、目的に応じて必要な情報を読み取ること。

これらの指導は、次のような言語活動を通して指導するものとされている。

ア 様々な種類の文章を音読したり朗読したりすること。

イ 文章と図表などとの関連を考えながら、説明や記録の文章を読むこと。

ウ 課題に沿って本を読み、必要に応じて引用して紹介すること。

この冒頭のアに、「音読」「朗読」が掲げられていることに注目したい。

カンボジアの日本語教育「読解」においても、「音読」「朗読」という学習活動を行っている。けれども、ただ、講師や学生が日本語で「音読」することにとどまっている。これらに示されたような内容を意識すれば、「読解」の授業の内容はより豊かなものとなるであろう。

2. 平成 24 年版『中学国語 1 伝え合う言葉』の「学習手引き」

本稿の「はじめに」に書いたように、昭和 26 年実施「学習指導要領」・同 33 年施行の「学習指導要領」が実施された昭和 28～36 年には、「音読と黙読」という活動が重視されていたが、それ以降の教科書の「学習の手引き」には、「音読」は確認されなかった。

しかし、平成 20 年告示の「学習指導要領」に準拠した平成 24～27 年版教科書『中学国語 1 伝え合う言葉』における単元「読むこと【構成と表現】」の「みちしるべ学習の手引き」には、「音読」が再び登場する。

この平成 24～27 年版の教科書の「みちしるべ学習の手引き」は、最初に次の 3 点を挙げてある。

- ①語り手と登場人物の関係に注意して、構成や展開、表現の特徴^{とくちよう とら}を捉える。
- ②音読をとおして、擬声語^{ぎせい}や擬態語の効果について考える。
- ③自分が見つけた疑問について考えたことを、根拠^{こんきよ}を明確にして文章にまとめる。

まず、この「みちしるべ学習の手引き」は、①で登場人物の関係・構成や展開、表現の特徴を把握させるが、これは平成 20 年度「学習指導要領」の中学校第 1 学年における C「読むこと」の能力の育成の次の 2 項に対応する。

ウ 場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容の理解に役立てること。

エ 文章の構成や展開、表現の特徴について、自分の考えをもつこと。

次に、②「音読」では「擬声語^{ぎせい}や擬態語の効果を考え」させるが、これは C のアに対応する。

ア 文脈の中における語句の意味を的確にとらえ、理解すること。

特に『オツベルと象』をはじめとする宮澤賢治の「擬音語・擬声語」(オノマトペ)

は、動作を直接的に感得するに適した言語表現であり、また「想像力および創造力に富んだ」「非慣習的な独自の」言語表現であるとされる⁽⁶⁾。

②には「音読」も示されているが、ただ「音読」が自己目的化しているのではない。ここでは「音読」を通して、擬声語や擬態語の効果を生徒に考えさせ、作品の会話文と地の文を把握することを目的としている。

カンボジアにおいても、「日本文学」(読解)を指導する際には「音読」が中心である。しかし、その目的は日本とは少し異なり、日本語で書かれた本を読むことに慣れて、たくさんの日本文学の作品を読めるようにと、《多読》へ導くことを目的とする⁽⁷⁾。「読むこと」に慣れるという点では、カンボジアのこれまでの指導法も、それなりの意味をもっている。けれども、「音読」が「音読」だけに終始しないという点はたいへん参考になる。

その意味で、②「音読」のあとで、③のまとめる力を育成するための文章化は有効な指導法である。②は次の事項と対応する。

オ 文章に表れているものの見方や考え方をとらえ、自分のものの見方や考え方を広くすること。

カ 本や文章などから必要な情報を集めるための方法を身に付け、目的に応じて必要な情報を読み取ること。

こうした読解の指導を見据えたうえで、「音読」の指導はなされるべきであろう。

この教科書の「みちしるべ学習の手引き」では、①②③に続いて、「確かめよう」「考えよう」という次の2段階の指導が示されている。

確かめよう

1 この作品を読んで、おもしろいと思ったことや疑問に思ったことをノートにまとめ、発表しよう。

考えよう

- ① 『オツベルと象』を音読し、擬声語・擬態語をノートに抜き書きし、用いられ方の特徴と効果について、話し合おう。
- ② 「第一日曜」「第二日曜」のオツベルと白象の会話部分を音読し、話の仕方から、どのような人物像が浮かんでくるか、話し合おう。
- ③ 「第五日曜」に描かれているできごとと、「第一日曜」「第二日曜」に描かれているできごととを比較し、どのようなところが違うか、話し合おう。
- ④ 語り手である牛飼いは、「オツベルときたらたいしたもんだ。」「頭がよくて偉いためだ。」「オツベルはやっぱり偉い。」など、オツベルを賞賛する言葉を何度も繰り返しているが、どんな気持ちで言っているか、話し合おう。
- ⑤ 白象は、なぜ「寂しく笑って」(P61L9)「ああ、ありがとう。ほとんどぼくは助かったよ。」と言ったのか、自分の考えを文章にまとめよう。

→文章名人3「根拠を明確にして書くには」(P168)を参考にしよう。

⑥牛飼いは、どのような気持ちでこの物語を語ったのかを考え、発表し合おう。

①～⑥は、「学習指導要領」の「アウエオカ」に対応する。

では、この「みちしるべ学習の手引き」にしたがって、『オツベルと象』の「読解」の授業の流れを想定してみよう。

①「音読」を通して、「擬音語・擬声語」の「効果」を学習したうえで、②「第一日曜」「第二日曜」の白象とオツベルの「会話」部分を把握するための「音読」をする。「音読」によって、「会話」の主体をはっきりと認識することが重要である。

③では、「第一日曜」「第二日曜」と「第五日曜」の違いを比較することによって、物語全体の推移する時間軸と「場面展開」を理解させる。

④では、オツベルのことを「繰り返して賞賛する」「語り手である牛飼いの言動を考えさせる。ここでは「牛飼いが「語り手」であるという点を理解させ、作品の複雑な構造を再確認させる。事の顛末を知る「牛飼いが、象に殺されたオツベルを何度も賞賛することの意味は、容易に答えが出ない問いでもある。そこで多様な意見を引き出すためにも、生徒同士の話し合いが有効となる。

これらの段階を経た上で、⑤「自分の考えを文章にまとめ」、考察する力とそれを明確に文章化する力を育成するのである。

最後の⑥は、④とも関わり、また、①～⑤すべての問いを包摂するものでもある。したがって、総合的・多角的な理解が求められる。そこで、あらためて学生たちは、牛飼いの気持ちを読み取るために、作品を読み返したり、場合によっては、音読を繰り返すなどして、作品全体を総体的に把握しようとするであろう。こうした作業を経た上で、⑥では、①～⑤を最終的に統括するような見解が発表できるように導く。

さらに、「みちしるべ学習の手引き」には、これに続いて以下のように、「場面の展開の特徴」を捉えるための注目点が提示され、作品解読の手順までもが詳細に説明されている。

◆ここが大事！「場面の展開の特徴」を捉えて

物語や小説の場面の展開の特徴を把握するために次の二つの点に注目しよう。

(1) 過去から現在に向かって進む時間の流れ。

(2) 冒頭の一行から結末の一行までの全体の構成。

この二つの点に即して、『オツベルと象』を読んでみると、どうなるだろうか。まず、(1)に注目して読んでみよう。「第一日曜」では、「白象」が「オツベル」の職場を訪れる。続いて「第二日曜」「第五日曜」では、「白象」の見る月が「三日の月」から「十一日の月」へとだんだん満ちていくことから、「オツベル」と「白象」をめぐるできごとが時間の流れに即して描かれていることがわかる。

次に、(2)に注目して読んでみると、この作品は、「……ある牛飼いがもの語る。」「第一日曜」「第二日曜」「第五日曜」の部分から構成されているが、これらは牛飼いがオツベルと白象をめぐるできごとを語った日であり、(1)の時間の流れとは関係があることに気がつく。

このことは、オツベルと白象をめぐるできごとの外側にいる牛飼いが、どのような思いでこの話を語っているかという問題を私たちに投げかけている。

このように、できごとの時間の流れと、作品全体の構成の両方に着眼することで、『オツベルと象』の世界を、より深く味わうことができるのである。

ここで学習したことを、^{ほか}他の物語や小説を読むときにも活用しよう。

平成24～27年版教科書の「みちしるべ 学習の手引き」の指導内容は、たいへん充実した内容であった。他の教材には、これほど詳細な「学習のてびき」は示されていない。その内容は、カンボジアで『オツベルと象』を教材として使用する際にも、十分に参考にできるものであった。

留意しておきたいのは、ここでの「音読」は、擬音語・擬声語の効果を学習するためと位置づけられており、その先に、作品の内容理解があるという点である。

今後、『オツベルと象』をカンボジア人日本語学習者に教えるにあたって、「音読」はまず最初の、必要不可欠な指導方法となる。この「みちしるべ 学習の手引き」を参考にして、「音読」を、作品理解に役立てていくことから始めたい。

むすび

「音読」は、日本の小中学校の国語の授業では、戦前から行われてきた。これに対して、カンボジア人の日本語学習者は読むことにあまり慣れていない。しかし読むことは、彼らにとっても大事である。読むことに慣れるためにも、「読解」の第一段階として「音読」は不可欠と考えられる。

しかし、「音読」のみに偏ってしまうと、作品の内容を理解させる段階にまで導くことはできない。『オツベルと象』の指導もそうである。特に、『オツベルと象』の構造は、カンボジア人日本語学習者にとって複雑だと考えられる。

この作品は、牛飼いと聞き手からなる「物語の外側の世界」と『オツベルと象』が織りなす「物語の世界」という2つの世界で描かれている。「物語の構造」を学生達に気づかせることができれば、学生達の読みも深まるのではないだろうか。

今後は、単に「読むことに慣れる」ための「音読」を脱して、「音読」を通して、まず、表現のおもしろさに触れること、次に作品世界の構造を理解し、登場人物の言動を正しく読み取るという作品読解の基本的な方法を重視していきたい。そして、最終的に

は「音読」を、表現としての「朗読」にまで高めていけるような指導を考えていきたい。

現在、大東文化大学の日本人の院生・学部生の協力を得て、「朗読劇」に取り組んでいる。その実践事例をカンボジアの日本語教育に役立てるとともに、カンボジア人日本語学習者のニーズに合った聴覚教材「朗読劇」の録音を完成させる予定である。

注

- (1) 拙稿『『オツベルと象』の「学習の手引き」—昭和 28～46 年教科書と「学習指導要領を中心に」—(『語学教育論叢』第 39 号、2022 年 3 月、大東文化大学語学教育研究所) 169 頁。
- (2) 前掲書 178 頁。
- (3) 前掲書 171 頁。
- (4) 文部科学省 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/1304372.htm
(最終閲覧 2022 年 9 月 14 日)。
- (5) 文部科学省 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/koku.htm
(最終閲覧 2022 年 9 月 14 日)。
- (6) 田守育啓「宮澤賢治特有のオノマトペ—慣習的オノマトペから音韻変化により派生した非慣習的オノマトペ—」(『人文論集』第 44 巻第 1・2 号、2009 年 3 月、兵庫県立大学神戸学園都市キャンパス学術研究会) 65 頁。
- (7) 拙稿「日本語教材『オツベルと象』の本文—漢字・語彙・文型のレベル—」(『外国語学会誌』第 52 号、2023 年 3 月刊行予定、大東文化大学外国語学会)。

[附記] 本稿を成すにあたって、藏中しのぶ先生、佐竹保子先生、安保博史先生、吉田慶子先生、三田明弘先生、杉山若菜先生、笹生美貴子先生、ダニエール・レスタ先生から貴重な御指導をいただきました。ここに記して、深く御礼申し上げます。